
月とウサギ

雨雨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月とウサギ

【Nコード】

N65860

【作者名】

雨雨

【あらすじ】

不器用な男〃月神様と思い込みがやや激しい動物〃ウサギの種族を超えた恋愛（変愛？）は色々あったけど、めでたしめでたし…で終わればよいものの、動物は得意の勘違いでついに天上神の国である天橋国から出奔。あまのはしのかくに

やっと再会した（この間、数千年）と思ったら、ウサギは人間の国で土地神（ある意味リア充）に収まっていて、その土地から切り離して天橋国に連れ戻すのは容易でない。

しかも未だにウサギは勘違い継続中。

とりあえず眷属に戻すことはできたものの、土地神をやめさせるには、地下神の許しを得ねばならないし、誤解の原因となった神様も現在は地下神の国である地道国^{ちのみちのくに}在住。

ところが天上神と地下神はかつて血みどろの離婚劇を繰り広げたため、国交が全くなく、地道国への入口がどこにあるのかわからない。天橋国でそれを知っているのは天上神と原因の神様だけなんだけど、天上神は絶対に口を割らないし、原因の神様はすでに地道国に移住してしまっている。

どうにか誤解を解いて、天橋国につれ戻したい月神様視点（コメディ？）寄りと、勘違いに捕らわれすぎて、男の気持ちに全く気付かない激ニブなウサギ視点（シリラス？）寄りで展開する予定。

新月の夜、巨石の上で（ウサギ視点）（前書き）

R15は一応の保険です。

なるべくそういう描写がないように書いていくつもりです。

新月の夜、巨石の上で（ウサギ視点）

夜。

雲一つなく、星が煌めいているが、何かが足りない夜。

何が足らぬのか。

月だ。

月がない。

それもそのはず、今宵は、新月。

ククッとほくそ笑むのは、一匹のウサギ。

この世でただ一匹、金の瞳のウサギ。

この世の兎の眼は、茶か黒。

この世で金の瞳をもつ兎は、このウサギのみだ。

この世で唯一のウサギは、はるか昔、この地に降り立ったときに与えられた巨石の上に座っていた。

月の見えぬ日は、人が建ててくれたウサギの為の社で眠るのが日課だったが、今日は珍しく気が向いてここへきていた。

「いささか、憐れと思わぬでもないな。力が万全となる日は1日だけとは。」

今宵など、何もできずにさぞ、齒痒いことだろうよ」

空を見上げたウサギはつぶやく。

今日、出会ったヘビが、教えてくれた話。

ウサギがこの地に降り立った日、月は禁忌を犯したらしい。

そんな話が、ここへと足を向けることになった。

そして今、煌めく星々から漏れ聞こえた話。

禁忌のせいで、元来丸い姿 今は満月と呼ばれる しか見せなかった月が、1日1日と、姿を変えねばならなかったらしい。

そして月は満ちるたび、元来の力を少しずつ取り戻すが、欠けるたびに少しずつ元来の力を失い、今宵のように完全に空から姿を消した日は、完全に力を失うらしい。

月の支配がないせいか、今日の星々はおしゃべりだ。

「どうりで、コロコロと姿を変えるようになったと思うたわ。そのような身では、夜を支配するのにも苦労しておるうな。

やはりいささか、憐れよ」

憐れとつぶやく割に、ウサギの顔に浮かぶのは笑みだ。

「それでもない」

応えなぞ望んでいないつぶやきにおや、とウサギは声の主へ振り向いた。

声の主が誰であるのかに気付き、体が一瞬震える。

「お懐かしや、夜の支配者様。

まさか、地上へ降りてこられるとは。

お父上の許しでも得られたのか」

ウサギが座するのはウサギに与えられた巨石。

ウサギの許しがない限り、他の者なぞ上がれぬはずのその場に、いつのまにやらもう一人、男が佇んでいた。

「父の許しなぞ、あっても降りてこられぬよ。

父が母の領域に干渉なぞ出来ぬ。その逆も然り、ではあるがな」
肩をすくめてほほ笑む男は、美しかった。

この世のどんな美女でも、この男には敵うまい。

この男こそ、月だった。

月が象徴するのは美。

この世のあらゆる美しさを具現化した存在が、今、ウサギの傍に佇む男だった。

「ならば、なぜ」

望まぬ訪問者を咎める気はないが、ウサギからは歓迎の様子も浮かばなかった。

男は唯人なら、見惚れ、呆けることしかできなくなる存在だが、ウサギにそれは通じない。

「どうやらな。天上での力を失う分、こちらへ干渉できる能を得たようだな。

新月になれば、こうやって地上にもこの身を下すことができる」
嬉しそうに笑う月。

「兄様たちにしでかしたことによる影響か？」
あにさま

「おそらく。お前の兄たちには感謝せねばな」

「それに関しては、こちらも礼をせねばなるまいな。」

兄様たちを救うてくれて、それだけは、感謝しているよ。

だが、私からの感謝の言葉を聞きたくてここへ来たのか？」
そのようないと

月はウサギの許しは得ず、ウサギの傍に座る。

「新月の度、ここを訪ねていたのだから、お主はつれない。」

新月の日にしか、地上に降りられぬが、幾千、幾万ともつかぬ新月を迎えてここを訪ねても、一度も会えないとは！

だが、今日、やっと会えた。

元気な姿が見れて嬉しく思う」

月は言いながら、ウサギの頭を撫でた。

月のその言葉に、行動に、わずかに瞠目したウサギだったが、それ以上は何の変化も見せなかった。

「それは私の質問の答えではないな。何用だと聞いたつもりだったんだが」

「ただ、お主に会いたかった。お主と話がしたかった」

ウサギに眉があつたなら、片眉をあげただろう。

けれど、残念なことにウサギに眉はない。

しばし月の意図を測りかねたが、やがて合点がいったように頷くと、嘆息した。

「夜の支配者様と私が話すことなぞ、一つしかないではないか。

あの方の話をいくらしたところで、傷を舐め合うようなもの。

そのようなことをしても、あの方の傍へなぞ行けぬよ」

ウサギの言葉に月は苦笑いを浮かべた。

そして、おもむろにウサギを抱き上げ、その視線を合わせる。

「お主は考えすぎだ。あの子の話でなくともよい。

ただただ、お主と他愛のない話がしたいのだ。

なぜ私の名前を呼んでくれぬ。
以前のように、呼んでおくれ。

なあ、私は今でも、お主は私のだと思っているよ。
本当に、会いたかった。

昔も今も、この先も、私はお主を変わず愛しているよ、トトラ
熱い瞳で語りかける男は、ウサギを真名で呼んだ。

ウサギの全身の毛が、沸き立ち、体が膨らむ。

それは歓喜でもあり、恐怖でもあった。

今日、巨石になぞおらねばよかったと後悔したが、遅かった。

この忘れもしない感覚は、月がウサギをおのれの眷属にした証だ
った。

震えながら、左の手の甲を見る。

真つ白な毛に覆われていたそこには、くつきりと月の印が赤い毛
となつて浮かんでいた。

まさか、男が地上へ来れるとは思っていなかったのだ。

まさか、いまだにこの男が己を支配下におくことができると思
つてもみなかったのだ。

「未だに天上の者は悪趣味か」
罵る言葉はか細い。

「やつとお主と会えたのだ。

二度とお主を失いたくないのだよ」

男の唇が、ウサギの頬に触れる。

（愛しているのは、失いたくないのは、私ではなく、あの方なのだ
ろう？ 夜皇様^{ヤムラミ}）

男の触れる感触が、とても心地よい半面、空しくもあった。

新月の夜、巨石の上で（月神視点）（前書き）

お待たせしました！！

新月の夜、巨石の上で（月神視点）

かつて、人間の国である、なかのまのくに中間国と、天上神の国である、あまのはしのくに天橋国とを繋ぐ橋があった。

今はもうない。

あまのはしのくに天橋国の神々が、人の国の統治を放棄し、人による統治を与えたとき、それは失われた。

同時に、天の神々は人の国に降りることはできなくなった。

もつとも、多くの神々は人の国になど行こうとしなかったが。

ともあれ、あまがけるあおはし天翔大橋と呼ばれたその橋は失われたが、その名残が、

この平原の真中に残っていた。

2つの大石が1つの巨石を支えるように積み上げられた岩

トトラが降った時に最初に触れたであろう岩だ。

ここはトトラの気が、一番感じられる場所だった。

もう数えることなぞ出来ないほど、ここへと降り立っては、トトラの気配を追って中間国中を探しまわり、結局最後はここへとたどり着いてしまう。

ここ以上に、トトラの気が感じられるところはないのだった。

探せば探すほど、ここにトトラがいるとしか思えなかった。

そして今日もまた、この岩へと降り立ったのだが、珍しく先客がいた。

それを目にした途端、それしか見えなくなった。

白く、丸い。

そして、小さな姿。

一つも、以前と共通する容姿を留めていなかった。

けれど、けれど。

形は違えど、それは間違いなくトトラだと確信した。

(見つけた　　！！！)

一匹の白い兎が、こちらに背を向け、空を見上げていた。

間違いない、間違いない。

己のトトラだ。

この衝撃を何と言えはいいのやら。

一言でいえば、めっちゃ可愛い……！！

どんな姿になっても、己のトトラはどんなに可愛いんだろう。

丸い体の後ろ姿に、ちよろんと生えた耳と尻尾がピコピコと動いている。

ああ、触って撫でて、こねくり回してしまいたい……！！

己の欲望にうずうずし、わなわなっと震える手を思わず伸ばした時、ククつと目の前の白い毛玉が笑った。

その嫌な笑いに手が止まる。

続く言葉は　　己を憐れとのたまった。

己がしでかした罪に与えられた罰　　己としてはちっとも困っていないのだが　　を受けた己を、憐れだと。

全身が震え、ちよつと泣きそうだ。

……嬉しい。

トトラが心配してくれることが嬉しくてたまらない。

このような姿になってもなお、己を心配してくれているとは！！
！

トトラの、その優しい心根は変わっていない。

「どつりで、コロコロと姿を変えるようになったと思うたわ。

そのような身では、夜を支配するのにも苦労しておろうな。

やはりいささか、憐れよ」

ああ、夜の支配に苦労しているだろうなど、心配しなくてもよい。
「そうでもない」

トトラを安心させたくて、その小さな後ろ姿に声をかける。

振り向いたトトラがふると身を震わせた。
わかつているよ、わかつている。

お前も私に会えて身を震わすほどに嬉しいのだろう？

「お懐かしや、夜の支配者様。

まさか、地上へ降りてこられるとは。

父上の許しでも得られたのか」

「父の許しなぞ、あつても降りてこられぬよ。

父が母の領域に干渉なぞ出来ぬ。その逆も然り、ではあるがな」

トトラの言葉に、思わず肩をすくめて笑ってしまった。

相も変わらず、面白いことを言う。

己が生まれる前に、父と母が交わした約束はこの世の理そのもの。
父や母さえそれを違えることは出来ぬということを知っているで
あろうに。

ただ、あの子を除いて。

「ならば、なぜ」

表情の読めぬ動物となったトトラの顔から何を思っているかはわ
からなかったが、その声に好奇心が混じっていることは察せられた。
ならばと、簡単に説明する。

その説明が十分とはいえぬことは承知していたが、己にも自身に
起きたことを十分把握しておらぬのだから、仕方がない。

けれどそのおかげで、こうしてトトラを探すことができるように
なったことが、己には喜ばしくて、自然と笑みが浮かぶ。

「兄様たちにしでかしたことによる影響か？」
あにさま

いきなりぶっきらぼうな口調になったトトラに、永い時の隔たり
を自覚する。

以前のトトラは、己にそのような物言いを決してしなかった。

その変化は、幾分の寂しさはあったものの、どちらかといえば、
好ましく感じられた。

「おそらく。お前の兄たちには感謝せねばな」

「それに関しては、こちらも礼をせねばなるまいな。

兄様たちを救うてくれて、それだけは、感謝しているよ。
だが、私からの感謝の言葉を聞きたくてここへ来たのか？」

……いやいやいやいや。

何を言うのか、このウサギめ。

そんなことを聞くためだけに地上へ降りるなど、そんな暇神ひまじんではないのだが。

これはじっくりと己の思いを述べてやらねばなるまいな。
トトラの傍に座って、語ってやることにした。

「新月の度、ここを訪ねていたのだから、お主はつれない。
新月の日にしか、地上に降りられぬが、幾千、幾万ともつかぬ新
月を迎えてここを訪ねても、一度も会えないとは！

だが、今日、やっと会えた。

元氣な姿が見れて嬉しく思う」

言いながら、我慢できずにトトラに触れていた。

思った通り、以前のトトラの髪とは異なり、柔らかくふわふわと
した感触の毛だったことが少し残念だ。

己を見上げるトトラの、己が一番愛してやまぬ、金の瞳が少しだ
け大きく開かれた。

姿形は変わったが、その瞳は変わっていない。

「それは私の質問の答えではないな。何用だと聞いたつもりだった
んだが」

「ただ、お主に会いたかった。お主と話がしたかった」

正直な気持ちを告げると、少し間をおいてトトラが頷いたので、
ほっとしたのも束の間、

「夜の支配者様と私が話すことなぞ、一つしかないではないか。
あの方の話をいくらしたところで、傷を舐め合うようなもの。
そのようなことをしても、あの方の傍へなぞ行けぬよ」

…まったく言っていていいほど理解していなかった。

今の己こそ、憐れと言われてしかるべきだと苦笑いを浮かべる。
そして、トトラが己の元からいなくなったのは、やはりあの子が

関わっているのだと合点がいった。

これは早急に誤解を解かねばな。

その小さな体を潰してしまわぬよう、慎重に抱きあげ、その金の瞳を見つめる。

「お主は考えすぎだ。あの子の話でなくともよい。

ただただ、お主と他愛のない話がしたいのだ。

なぜ私の名前を呼んでくれぬ。

以前のよう、呼んでおくれ。

なあ、私は今でも、お主は私のだと思っているよ。

本当に、会いたかった。

昔も今も、この先も、私はお主を変わず愛しているよ、トトラ」
一つ一つの言葉を、ゆっくりと言い聞かせながら、わずかにその身の内に残っている力をその小さな体に注いだ。

見た瞬間に気づいていた。

トトラが土地神となっていることに。

土地神は、与えられた土地に縛られ、天空神の天橋国にも、地下神の地道国ちのみちのくににも属すことのできぬ神だ。

それは人に祭り上げられることによつてのみ存在でき、それゆえに人に忘れられれば、どちらにも属せぬ土地神は霞となって消えてしまふ運命にある。

どちらかの国に属す神ならば、そのようなことはない。

幸い、トトラは土地神として日が浅く、それでも人にとっては永い時ではあるが、土地への束縛がまだ弱い。

なんとか、また天橋国に連れてゆく事が出来るかもしれないと思つた。

人ごときの都合で、己のトトラを失つてたまるものか。

力を注がれたトトラの全身の毛が、沸き立ち、体が膨らむ。

その反応に満足した。

新月という悪条件にもかかわらず、己の眷属とすることができた。やはり、まだ手遅れではないらしい。

トトラがか細い声で何か言ったようだったが、己のものに戻すことのできた満足感に夢中で聞き取れなかった。

喜びの言葉を告げ、かつてそうしていたように、トトラの頬に己の唇を寄せた。

新月の夜、巨石の上で（月神視点）（後書き）

月神様は、トトラに対して盲目かつ傲慢な愛情を持っています；

ウサギの社にて（ウサギ視点）

ウサギは、己の左手を見つめていた。

あの後、月神は日が昇るまでウサギを愛で、消えた。

その間のウサギは、ウサギの心は、空虚であった。

一時の寵など得たところで、満たされぬのだ。

同じく満たされぬのならば、傍になぞいたくない。

欲深い己が、傍にいれば月神を困らせる。

困らせたくないから離れたというのに。

昼。

よく晴れた昼下がり。

虫も鳥も、太陽の光にあふれた今日を楽しんで、陽気に躍動している。

それに反して、とある場所だけが沈んだ空気を凝らせていた。

その場所とは、ウサギに与えられた巨石のほど近くの村にひっそりと建てられた小さな社である。

社、とはいうものの、それは高床式になった犬小屋かと見間違っただけで、それほど地味なものだ。

唯一凝っているのは、格子の扉につけられた取っ手が、黄金で作られた兎の形をしていることくらいか。

言うまでもなく、人間がウサギのためにつくった社だ。

社の中で、ウサギは何度も左の手の甲を見ては、ため息をついていた。

その手は毛が無残に剥げ、傷ついて、いくらかの血がこびり付いている。

「齧って毛を取り払ろうても無駄だったか。

ふん、地肌にも印が現れておるわ。

いっそ皮を剥いでも……無駄であろうな」

己の左手を忌々しく眺めやりながら、あれは夢であってほしかったため息をつく。

途中まで、ウサギは夜皇のことを夢だと思っていた。

いつの間にか眠り、夜皇恋しさに己がでっちあげた夢なのだと。

天の神が中間国に降りるなど、絶対にあり得ぬからこそ、夢だといや、あり得ないというより、出来ないはずと、ウサギは知っていた。

それゆえ、戯れにお懐かしや、などという言葉をかけることもできたのだ。

けれど、この印が夢でないことを嫌になるほどウサギに自覚させた。

己の夢であれば、夜皇がこのような印を刻むはずはない。

己は夜皇の眷属となることを心の底から嫌悪しているのだから。

夜皇の眷属のままでいることが耐えられなかったからこそあの時、混乱のどさくさにまぎれて下に降りることにしたのだ。

「忌々しい。」

またこれに悩ませられねばならぬとは

いつそまた逃げてしまいたい、この印がある限り夜皇が己の居所を知るのはたやすいことだ。

「どうすれば、どうすればよい？」

どうすれば……」

ぶつぶつと呟いて自問するが、結論は一つだ。

どうにもできない。

そう、どうにもできるものではない。

天橋国にいたころであれば、この印を消すことなど造作もなかった。

あの方がいたから。

今は、無理なのだ。

あの方がいないから。

天橋国にも、中間国にも、あの方はいない。

天の神も、地上のあらゆる生あるモノも辿り着くことのできぬ場所
所に、あの方は行ってしまわれた。

その国に行く術を知っていたのは、天橋国ではあの方一人。

「あの方のいる国へ、私がどうやって行けようか」

また、ため息。

あの方、を思い出すと慕わしさとともに、嫉妬の心も燃え上る。
もうずいぶんとこの心持を思いだすこともなかったというのに。
やはり、夜皇の噂に感傷なぞ抱いて出歩いたのが悪かったのか。

「ええ、私は何を考えようと、何が変わるでもなし」

ままよ、と半ばやけくそで社を飛び出した。

村を駆けまわればこの鬱々とした気分も少しは晴れるだろうと期待して。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6586o/>

月とウサギ

2011年12月27日19時45分発行